

書評と紹介

リアナ・トルファシユ著

『シンボル理論と伝統思想』

——プラトンのキリスト教思想の意味世界——

大河書房 二〇〇七年二月二〇日刊
A5判 二八八頁 八四〇〇円＋税

桑原直己

本書は、著者の博士論文『聖なるシンボリズムの形而上学的基礎——シンボルを語る伝統思想——ディオニシオス集成』をもとに、これを加筆修正し、日本学術振興会平成十八年度科学研究費補助金（研究成果公開促進費）の交付を受けて出版されたものである。

著者リアナ・トルファシユ女史は長年日本に在住する宗教学者であるが、ルーマニアの出身、すなわち、かのミルチャ・エリアーデの同国人である。著者はエリアーデのいわば「孫弟子」にあたるが、両者の間には不思議な縁で現在は筑波大学名誉教授である荒木美智雄氏が介在している。そのことについて、著者は次のように語っている。

「日本に来てある日、一人の日本人の友人から新聞にエリアーデの逝去が報じられていることを知らされた。訃報にはシカゴ大学でエリアーデのお弟子であった筑波大学教授、荒木美智雄氏の記事が付されていた。当時は筑波大学の存在さえ知らぬ筆者であったが、誰の紹介もなく敢えて荒木先生の研究室に電

話をした上で筑波大学で先生にお目にかかった。唐突であったが、ここで筆者は自分の進むべき道を決めてしまっていた。「この先生の指導のもとで宗教学を学ぼう」と。……こうして思いがけずも、シカゴでエリアーデの学生であった荒木先生を経て、祖国ルーマニアからは遙か離れた日本で筆者は宗教学にたどり着いたのである。」（二六七―八頁）

評者は西洋中世倫理思想が専門で宗教学は専門外であるが、一般に宗教学者に対しては常々「対象である宗教に対してもっと内在的・共感的理解を示してほしい」との思いよりはつきり言えば不満を抱いていた。しかし、評者自身筑波大学に移り、荒木氏が定年退官されるまでの数年間を共に過ごさせていただく機会を持った結果、その考えに変化が生じた。宗教学の内実について立ち入ったお話をする機会はあまり無かったものの、氏の雰囲気には評者がそれまで抱いていた「宗教学者」のイメージとは一味違うものを感じさせるものがあつた。すなわち氏には、宗教をあくまで「外から見ること」に固執する宗教学者像とは異なり、対象に対する強い内在的・共感的理解の姿勢が感じられた。これはおそらく、「解釈学的アプローチの頂点に立つ」とされるエリアーデ以来の学風のなせるところではないか、と、評者も門外漢ながら感じていたところである。そしてそうした基本姿勢は、本書におけるトルファシユ女史のスタンスにも見てとることができる。

「本書の主な目標は、『ディオニシオス文書』として知られている著作を実例として、他の、とりわけ中世において『文書』のシンボル理論を展開し説明している著作や現代研究を助けと

して、キリスト教的伝統、より厳密に言えばプラトンのキリスト教思想の宗教意味世界における聖なるシンボルがどのように考えられたかを探り、それを明らかにすることである」(七頁)。

著者は、母国ルーマニア在住当時から、すでにエリアーデなどの影響で「宗教的シンボリズムに大きな関心をもち」、先述の経緯で荒木教授のもとで研究を進めるようになってからも、「シンボリズムの研究から一瞬たりとも離れたことはなかった」(二六八頁)。その著者によれば、現代のシンボル理論は「二つの先入観にとらわれている」と言う。

(1) 世界の諸々の伝統において、人々はシンボルを用いながらも、それが何であるかを明確に知らず、シンボルがようやく解明されるためには現代の解釈学を「待たねばならなかった」。

(2) シンボルはその本質において単なる記号であり、その構造は記号の構造に還元することができる。

こうした先入観の結果、現代のシンボル理論では「シンボルを構成する要素(シニフィアンとシニフィエ)だけが注目を集め、両者を結ぶ関係は約定によるものにすぎない」と見る傾向が強い、と著者は指摘する。本書における著者の基本的主張は、こうした現代のシンボル理論の傾向を批判して、「伝統的宗教世界にとってはシンボルの本質は単なる記号」ではなく、また「その構成要素を結ぶ関係は、約定によるものではなく、存在上かつ本質上の内的関係」(三頁)であることを明らかにすることにある。

著者は「シンボルをその本性において把握するという目的に近づくためには、現代の「支配的シンボル理論」がその「支配」を放棄しなければならぬ」と主張する。つまり、「シンボルについて現代思想が述べることだけではなく、シンボル理論にその固有の刻印を押した伝統思想にも敬意をもって接し、それを探求することが必要」であり、「伝統自体がシンボルについて語るところ、とりわけシンボルの根底をなす諸原理に改めて耳を傾けなければならない」と言う(四頁)。ここに、研究対象に対する女史の強い内在的・共感的理解の姿勢を看取することができる。

そうした基本的なスタンスのもと、著者は「キリスト教における、ディオニシオス・アレオパギテス著として伝えられている『ディオニシオス文書』を中心文献として選び、それに記述されているシンボル理論、すなわちそれに関する考え方や解釈を紹介し考察する」(五頁)ことをもって本書の課題としている。

著者は『ディオニシオス文書』を取り上げるにあたり、シンボルについての伝統的な理論にとってこの文書が有する重要性を四つの点にまとめている(五―六頁)。

(1) 『文書』が述べる聖なるシンボルの理論は、西洋文化においてはシンボルの伝統理論として最も完成した形を示している。

(2) 理論の思想基盤について言うならば、『文書』はキリスト教のみならず、ギリシア思想、すなわちプラトニズムや新プラトニズムとの接点に位置し、前者の枠組みにとどまりなが

書評と紹介

ら、後者からいくつかの貴重で形而上学的な概念を借りたことによって、そのシンボル理論にはきわめて高い哲学的水準が与えられた。

(3)『文書』は聖なる宗教的シンボルの基礎文献であり、無二の権威をもつものであり、シンボリズムならその分野を問わず、中世ヨーロッパにおいて圧倒的な影響を与えたものである。

(4)「シンボル」という言葉自体が広汎に知られ、用いられるようになったことは、『文書』に起因する。

本書の全体において著者は、『ディオニシオス文書』による聖なるシンボル理論の決定的特徴を、「シンボルの実体を存在そのもの、あるいは形而上の領域に定めたこと」にある、としている。特に『ディオニシオス文書』が述べるシンボルが、「特殊な形而上学、すなわちプラトンのキリスト教形而上学の枠組みにおいてのみ理解されうる」(七頁)ことを明らかにすることを目指している。

本書の構成は以下の通りである。

第1章は「聖なるシンボルを語る伝統の背景」と題しており、『ディオニシオス文書』そのものについて、その成立、著者、キリスト教思想における位置などについて紹介した上で、同文書において初めて登場した「シンボル」(正確にはギリシア語で「シンボロン symbolon」という語が示した意味の変遷について明らかにしている。本来は「割符」や「おふだ」のような具体的なものを意味していたシンボルという語が、「象

徴」、特に「見えないもののしるし」としての意味を得るに至った経緯を概観している。

『ディオニシオス文書』が新プラトニズムと深いかわりをも有することはよく知られている。本章において著者は、『ディオニシオス文書』の本質を「プラトンのキリスト教文書」としておさえたと上で、そこでのシンボル理論の基礎が「創造の形而上学」にある、と指摘している。そして本書においては、その創造の形而上学における、「可感的世界と可知的世界の区別、アイデアおよび分有思想、存在階梯、特殊な因果関係など」が考察すべきテーマとなることが示されている。

第2章は「文書」におけるシンボル——必要性、役割、解釈」と題している。ディオニシオスは「しるし」一般の概念を精緻化して「シンボル」の意味を析出するが、「シンボル」の役割を「われわれに感覚では捉えられない可知的なものを悟らせる」こととして示している。著者は、ディオニシオスによるシンボルの役割や解釈について詳細に分析した結果、ディオニシオスにとってシンボルの使用は特に「教会位階」にとって必要不可欠なものであり、シンボルの解釈は、神秘体験や伝統のなかでの伝承されたために基づくものと考えていることを示す。そして、「シンボルの最高の役割とは、儀礼により人を「神化 theosis」へと導くことである」と結論づけている。

第3章は「聖なるシンボルの根底にある宇宙観」と題しており、『ディオニシオス文書』におけるシンボル論の基礎をなす宇宙論の三つの特徴を明らかにしている。第一に世界は「イコン(似姿)」からなっている。すなわちディオニシオスにおい

て、可感的世界は可知的世界の「似姿」をなしている。第二に、宇宙は存在上の位階により構成されている。そして第三に諸事物もまた内的には存在上の位階により構成されている。

第4章は「シンボルと因果関係」と題している。ここでは、「シンボル」は、「感覚で捉えることのできない元型の感覚で捉えることのできる似姿」であり、またそれは「感覚で捉えることのできない原因の感覚で捉えることのできる結果」であることが示される。元型と似姿の両者は、「本質上あるいは存在上の因果関係にある」ものとされる。ある事物が「シンボル」であることのゆえんは、事物がその本質因の結果であることによる。さらに、原因と結果、元型と似姿の間にあるいくつかの側面について解説している。

第5章は「事物・シンボルと分有論・内在論」と題しており、「分有」と「内在」から見た事物・シンボルの関係、また事物・シンボルの関係を似姿・模倣たらしめる「分有」「内在」という二つの観点から、ディオニシオスのシンボル論の中心的原理ともいうべき、「原因と結果」、「元型と似姿」の関係を説明する「分有論」と「内在論」、またその他の側面とも言える「先包論」について解説している。

第6章は「シンボルと類比論」と題してシンボルの根底にあるすべての原理をまとめているとも言える「類比論」、またそれに付随する「対応論」について解説している。まず類比に関して言われている「非類似的類似性」という逆説的な表現の意味について、「本質上の非類似・類似の度合」という形で明らかにする。また類比とは、本質を受け容れる力であることを明

らかにする。そして、シンボルを司る法則は最終的には本質上の類比・対応の法則であることを明らかにしている。

最終章である第7章において「聖なるシンボルに関する総合的結論」が提示される。シンボルを存在上かつ意味上の「矢筈（矢の後端）」と「鏃（矢の先端）」とする比喩が紹介される。次いでディオニシオスが語るシンボルのもつとも知られている一つである「火」のシンボリズムを具体的例として分析している。そして最後に『文書』のシンボル論に関する学界の主な意見、批判を紹介している。

冒頭に述べたところから察せられることと思うが、評者は研究対象に対する著者の強い内在的・共感的理解の姿勢に深い共感を覚えるものである。実際、本書の全体を通して、『ディオニシオス文書』の根幹をなしている「プラトンのキリスト教形而上学」に対する著者の深い尊敬の念、というよりは衷心からのコミットメントが伺われる。また、「伝統自体がシンボルについて語るところ、とりわけシンボルの根底をなす諸原理に改めて耳を傾け」ようとしつつも、実証的な学問性を追求しようとする著者のスタンスは、評者自身の専門である西洋中世についての思想史的研究に限りなく接近している。

『ディオニシオス文書』はそれ自体、中世思想史一般にとってもきわめて重要な意味をもつテキストである。また、ディオニシオスの「精神的後継者」としては、東西のキリスト教的伝統に属するほとんどすべての中世の著作家たちが挙げられることになる。すなわち、証聖者マクシモス、エリウゲナ、サン・

書評と紹介

ヴィクトルのフリーゴ、アルベルトウス・マグヌス、ボナヴェントゥラ、トマス・アキナス、エックハルト、ニコラウス・クザーヌスなどである。

著者は、ディオニシオスのシンボル論に取り組むに当たって、方法的に悩まれたようである。「ディオニシオス文書のみを唯一の資料として探求をつづけるか、あるいは解明のために他の文献を用いるべきか」(二六九頁)。結局著者は後者の道を選び、「精神的ディオニシオス派」と呼ばれるべき上述の西洋中世の思想家たちによる文献を広汎かつ自在に援用して、後世における思想的展開の中からもディオニシオスのシンボル論の意義に光を当てている。

無論、宗教的「シンボル」概念に関する解釈学的理解をめざす本書の目指すところと、思想史プロパーの研究との間には相違がある。十九世紀以降の批判的研究の結果、『ディオニシオス文書』の著者は、パウロがアレオパゴスの丘でアテネの人々に対して説教を行ったとき最初に改宗した「ディオニシオス・アレオパギテス」その人ではないことが明らかになったが、その後、この文書およびその著者の性格については思想的には喧しいばかりの議論が展開することとなった。論争は要するに、『ディオニシオス文書』は新プラトン主義者によるプラトン主義的な文書なのか、本質的にキリスト教的な文書なのか、という点をめぐるものである。本書ではそうした問題に深入りすることなく、ただ「プラトンのキリスト教文書」たる『ディオニシオス文書』が宗教的シンボル論の源流に立つ古典として有する価値を確認するのみにとどめている。また、ディオニシ

オスの「精神的後継者」として広範囲の中世思想家たちの文献を扱う際にも、「ディオニシオスと彼ら(たとえばボナヴェントゥラ、エックハルト、クザーヌスなど)の間にある学說的相違を考慮に入れなかった」(二六九頁)と著者自身断っている。こうした姿勢は、思想的な研究に限りなく接近しつつも、あくまでも宗教的「シンボル」概念そのものの理解をめざそうとする著者の明確な目的意識の帰結である。本書が西洋中世思想史における広汎な資料を駆使しつつも、それらに流されることなく一貫した視座を提起しえているのは、そうした宗教的「シンボル」の意味をめぐる粘り強い思索が支えになっているからだと思われる。

最後に、エリアーデの同国人である著者が、敢えて「祖国ルーマニアからは遙か離れた日本で」日本語によって研究を進められ、その成果を完全な、美しい日本語で本書にまとめられた、という事実を指摘し、そのことに対して、深い敬意を表することによって本稿を締めくくることがしたい。